

〔調査報告〕

# 京都市・佛陀寺諸尊について

—— 平安時代後期の2作例をめぐって ——

青 木 淳

はじめに

寺史について

調 査 報 告

1 阿弥陀如来坐像（本尊 本堂所在 重要文化財）

2 地藏菩薩坐像（地藏堂所在）

3 帝釈天立像（伝青観世音菩薩 本堂所在）

4 阿弥陀如来立像（本堂所在）

お わ り に

はじめに

大蔵院佛陀寺は、京都市上京区鶴山町に所在する西山浄土宗の寺院である。

今日本寺に伝来する唯一の寺史である『佛陀寺興廃略記』<sup>(1)</sup>（以下『興廃記』と略記す）や近世の地史<sup>(2)</sup>によれば、本寺は平安時代の中頃、天慶9年（946）に朱雀天皇が皇位を村上天皇に譲位の後、父醍醐天皇の菩提を弔うため日蔵道賢を戒師として落飾し、「佛陀寿」と号して朱雀大路の仙洞朱雀院に遷り、同地において仏事を修していた所が本寺の前身という。朱雀院は天曆6年（952）同所にて没したので、後に村上天皇がここを仏寺として整備して別殿大蔵院とし、また寺号を朱雀天皇の法号（仏陀寿）に因んで佛陀寺としたのが寺院となったはじめという。本尊は重要文化財の説法印の阿弥陀如来坐像で、

平安時代後期の制作と推定され<sup>(3)</sup>、これまでも写真図版などによって紹介されているが、その詳細は報告されていない<sup>(4)</sup>。

さて、本調査は、昨年7月上旬、筆者が京都市上京区寺町界隈の諸寺を拝観させて頂いていた折りに、たまたま本寺の山門脇の地藏堂（「王城地祭地藏尊」）の堂内を拝見したところ平安時代後期の作と見られる地藏菩薩坐像が安置されていることを知ったのはじまる。その後、本寺の御住職が筆者の在籍する佛教大学職員の高木英二（英準）氏である事を知り、あらためてこの地藏菩薩坐像及び、阿弥陀如来坐像の調査を希望したところ快くご承諾いただいた。調査にあたっては、近世の地誌に「鑑観世音菩薩」と見える帝釈天立像（本堂右脇に安置）<sup>(5)</sup>、ならびに阿弥陀如来立像（本堂右脇壇に安置）の調査、撮影を併せて行った。小稿は諸尊の概略を報告し、彫刻史上における位置について検討することを目的としてまとめたものである。

## 寺史について

先に述べたように、本寺は、はじめ御所内の仙洞朱雀院にはじまったが、『興廃記』の記事では、朱雀天皇、村上天皇の記事に次いで、室町時代に本寺を中興した邦諫（妙諫）にいたるまで記事がなく、その歴史が不明瞭である。室町時代中期には堂塔を万里小路春日の北に遷っている<sup>(6)</sup>。さらに応仁の乱の御霊林の戦いで焼失した際には、邦諫が後土御門天皇の帰依を受けて、文明8年（1476）土御門西洞院の地に西山浄土宗の寺院として中興したが、再度永正4年（1507）兵火にあって焼失した。邦諫の跡を嗣いだ二世融国は後柏原天皇の帰依を受け<sup>(7)</sup>、本寺再建の綸旨を得て諸国を勧進して歩いている。この折り一条烏丸の地に遷っている。現在の地には天正19年（1591）の御土居築造の頃、秀吉による寺町整備によって移されてきたものである<sup>(8)</sup>。（同地に遷ってからも寛文元年（1661）、天明8年（1788）の再度焼失している。）

こうした度重なる戦火による焼失と移転を繰り返した結果、恐らく本寺は多くの文化的遺産を灰塵と化してしまったのであろう。そのために後に述べる本尊像ならびに地藏菩薩像の造立されたと推定される12世紀後半の本寺の歴史

は、文獻的には何も見えてこないのである。しかし、本寺の諸尊はそうした空白の時代のことを語りはじめている。

## 調 査 報 告

### 1. 木造阿弥陀如来坐像（重要文化財）

本寺本尊<sup>(9)</sup>。像高 84.8cmの說法印の坐像で肉髻相（肉髻珠なし）、螺髮（彫出）、白毫相をあらわし、耳朶は環状で、三道を彫出する。大衣を偏袒右肩に着け、右足を外にして結跏趺坐。両手は屈臂し、共に胸前で第1・3指を捻じって說法印を結ぶ。曼網相をあらわす。

構造はヒノキ材の割矧造り。漆箔。彫眼。頭体の根幹部を、縦一材より彫出し、三道下で頭体を割りはなす。頭部は前後に割り、さらに後頭部に別材を矧ぐ。体部前面材、左肩前面材は各々地付きにまでいたる（左肩材は地付き部の先端を細く仕上げている）。背面には背板状に一材を矧ぐ。膝前部に一材、右腰脇に三角材を寄せる。内削りを施す（ノミ痕を残した荒目の仕上げとなる）。裳先別材。左手は袖部に前膊内側を含む一材を寄せ、さらに前膊半ばから先外側に小材を矧ぎ、手首より先を別材とする。右手は肩、臂、手首の各部で矧ぎ背面の上膊と体軀をわたる大衣に小材を矧ぐ。

保存状態は概ね良好だが、後頭部矧付材、両耳朶、左手第2・4指指先、右手第3・4・5指指先、漆箔、裳先、光背、台座は後補となる。

左体側蓮肉に垂れる大衣の一部、右腰地付き部が新補となる。白毫が欠失し、膝前部左側面に干割れを生じている。

本像は、『興廃記』の記事によると「慧心僧都の正作」<sup>(10)</sup>とあるが、それに次いで開創期の宗旨や本尊がいかなるものであったかは不明であるという<sup>(11)</sup>。また、同書には朱雀天皇が落飾した天曆6年（952）は、恵心僧都が11歳の時にあたり、あるいは「今ノ本像ハ中古ニ安置セル事ヲ知ルベシ」という著書甲空の註釈が付されている。次いで、本像に関する伝歴は、室町時代中期に応仁の乱後、荒廃したままになっていた本寺の中興開山となった邦諫に関する記事

まで見当たらない。邦諫は、御土御天皇をはじめとして当時の宮中、諸皇族の帰依を受け、文明8年（1476）には佛陀寺を勅願寺とする綸旨を取りけている<sup>(12)</sup>。『興廃期』には、この邦諫に関わる因縁話が伝えられている。

ある時、乳飲み子が、佛陀寺の前に捨てられていたところを何れからか婦人が現れて赤子の邦諫に乳を与えていたという。住僧は不審に思いながら様子うかがっていたが、寺に帰ってみると本尊の右の胸から白い汁が流れ出て、膝元に落ちていたという。住僧はそれを見てこの子が育てられたのはこの御本尊の御慈悲によるものだとして奇瑞に感じ、この赤子はそうした仏恩に背むかめよう出家させたという。それが後の邦諫となったという因縁話がある<sup>(13)</sup>。

また、『興廃記』には「今ノ本尊ハ源勸法子ノ安持佛ト云フ此人何レカ尋ヌベシ」という記事がみえる。僧侶では源勸なる人物は鎌倉時代初期には見当たらないが、『尊卑分脉』によると嵯峨源氏の一門に源勸（みなもとのすすむ）という人物がおり、あるいは本像の造立年代から考えてみても、何らかの関係のあった人物かもしれない<sup>(14)</sup>。

本像は基本的には、温和で端正な雰囲気を持つ定朝様によってつくられている。安座の状態もごく自然で、鎌倉時代の仏像に見られるような前傾姿勢は見られない。やや広めの半球状の鉢を伏せたような肉髻に、わずかに両側に膨らみをつけた地髪部をあらわし、螺髪は比較的細かく彫出されている。頬の豊かな張りのある面相には、まるで少年を思わせるものがある<sup>(15)</sup>。伏し目がちに刻まれた目は、12世紀中頃の作とされる京都・法金剛院阿弥陀如来坐像（大治5年＝1130年の作カ）<sup>(16)</sup>、京都・安楽寿院の阿弥陀如来坐像（保延年間＝1135～1141年頃の作カ）<sup>(17)</sup>、より京都・万寿寺阿弥陀如来坐像（永萬元年＝1165年頃の作カ）<sup>(18)</sup>、にいたる作例に比して、やや大きく見開いた状態で彫出されている。

体に纏う衣は薄手で左肩に懸けられた大衣や、膝前の腿から膨ら脛に懸かる衣は肉身に沿うように彫出されている。またその衣文は形式的ながら、皺波に沿って小さな縞を彫り出すことにより翻波式衣文に通ずる表現となっている<sup>(19)</sup>。頬、掌、足裏などに定朝様の像としては比較的にたっぷりとした肉取

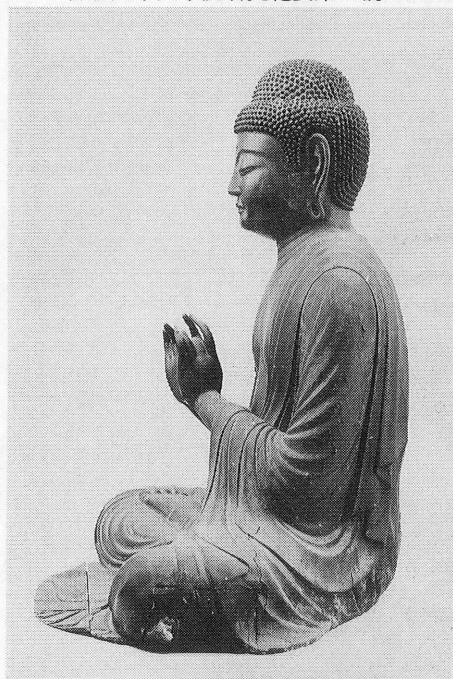




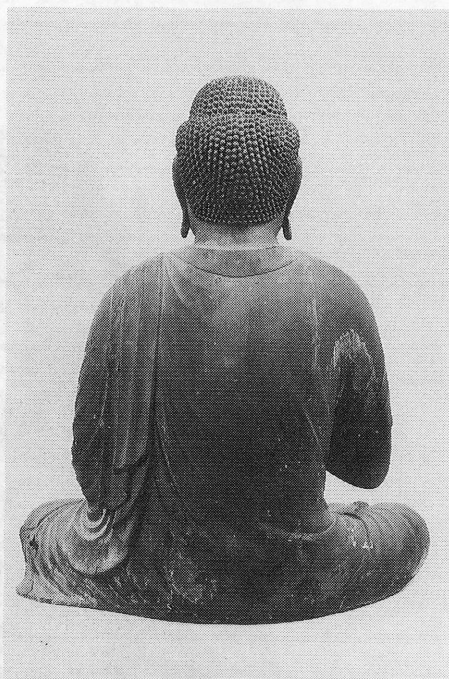
阿弥陀如来坐像



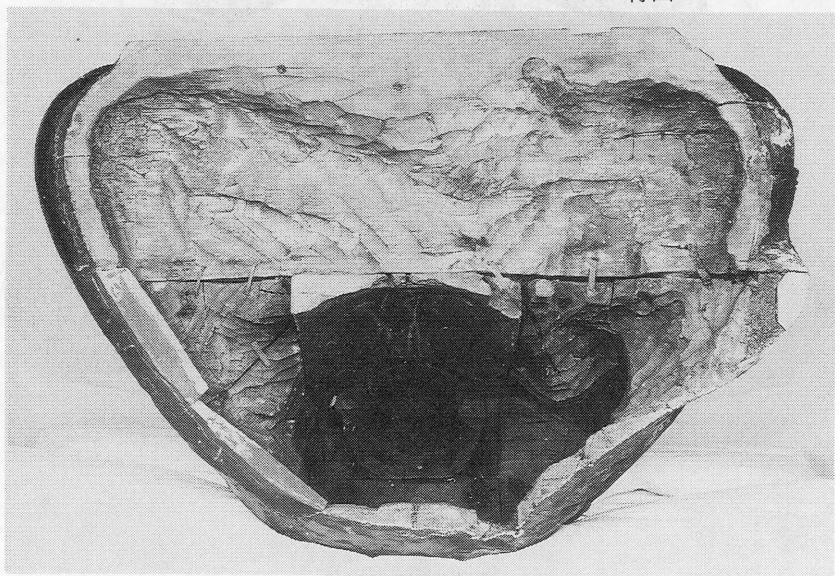
阿弥陀如来坐像



左側面



背面



像底

りを施し、両腰部より背面への緩やかで自然な肉身の立ち上がりをもたせているあたりは、初期の定朝様よりもその造形感覚の方向は、鎌倉時代に好まれた豊満で肉質感ある造形へと向かっているものといえよう。さらに耳の中まで細かくきれいに彫りこまれているあたりは、同様に本像の造形思考が鎌倉時代に流行した写実的なものへと向かっていることが窺える。反面、少年相や、衣文表現に見られる陰刻線、右足首に懸かる衣に刻まれた、いわゆる松葉型衣文が見られる点、また唇に輪郭線をつけず縞だてているあたりに、作者が定朝以前の造形にも関心を示していたことが窺われる。

また、構造面の特色としては本像の体部前面に用いられた材が、地付き部にまでいたるものである点があげられる。こうした束制作の目的は、地付き部における像の重量の分散、像底部にさらに安定感をもたせることによる転倒防止等の理由が考えられるが、本像の場合、束が二股に別れていることから前者の要素が強いものと見られる。こうした工作技法は 10 世紀中頃の制作とされる京都・六波羅蜜寺の薬師如来坐像より定朝作の京都・平等院阿弥陀如来坐像（天喜元年＝1053）、鎌倉時代後期の院派の仏師院興によって造立された神奈川・覚園寺阿閼如来坐像<sup>(20)</sup>（元享 2 年＝1322 作）というような京仏師の手になる作例に多く見られる特長といえよう。さらに南北朝時代に活躍した同じく院派仏師で福岡・善導寺の宝冠阿弥陀如来坐像を造立した院廣の作例には多くこうした地付きにいたる束の制作が行われている<sup>(21)</sup>。

以上述べた諸点から考えて本像の造立年代を 12 世紀後半と推定される。作風としては本像も井上正氏が述べるような「少年のような相貌・全身をつつむおぼろな情感」とその特長を評された康尚様式の影響をうけた、定朝様によってまとめられている<sup>(22)</sup>。また、同様に康尚様式への回帰の跡が見られる作例として安楽寿院像、万寿寺像、後白河法皇の念持仏と伝えられる京都・専定寺阿弥陀如来坐像<sup>(23)</sup>にいたる作例に次ぐものと見られ、下限についても近年紹介された建久 6 年（1195）の造立と見られる滋賀・来迎寺の阿弥陀如来坐像<sup>(24)</sup>のような、同じく説法印で本像よりさらに鋭さと張りのある造形が生み出されているところを見ると、本像の作風は来迎寺像に先行する作例とみてよいと思われる。



## 2 木造地藏菩薩坐像

地藏堂安置。像高 85.6cmの坐像<sup>(25)</sup>で、頭部を円頂とし、白毫相（水晶製嵌入）をあらわす。耳朵は環状で、三道を彫出する。着衣は両肩を覆う衣を着け、その上に大衣を纏う。また腹前に下衣の結び目をみせ右足を外にして結跏趺坐する。左手は屈臂して掌を上 に宝珠をとり、右手は膝上で掌を上にして五指を伸べる。

構造はヒノキ材の寄木造り。彩色を施す。底板があてられているためにその詳細は明らかでないがおおよそ次のように推測される。頭部は左右二材矧ぎとし、体幹部は前面左右二材、背面にも背板状に左右二材を寄せる。さらに左右体側に肩下りより地付きにいたる各一材を寄せる。膝前部に一材、喪先に別材を矧ぐ。両袖部、両手首より先部に別材を矧ぐ。内割りを施す。

保存状態は概ね良好で、彩色・胸飾の盛り上げ彩色・白毫・左袖部・左手首先部右手第3・4指指先、裳先・底板・持物・光背・台座が後補となり、また鼻先、上唇、体部正中線上の材の接合部に補修の跡がみえる。

### 追記

近世に入って一度彩色を伴った補修が行われたものと見え、うっすらと頭部に髪際線の跡や両肩より背面にかけて蓮華文などの文様が見られる。大きめの白毫や胸飾、像底にはめこまれた板などもこの時のものと思われる。

『興廃記』によると「此ノ尊像ヲ当寺ニ安置シ奉ルコトハ、有り難クモ人王六十二第村上天皇先帝朱雀天皇」が仙洞院を仏寺として建立し、この折りに「此ノ尊像ヲ安置シ給イケル」ものとされている。今日では王城鎮護の地藏菩薩として「王城地祭地藏尊」と呼ばれ、また腹前に下衣の結び目をあらわしていることから「帯解け地藏尊」としても広く信仰をあつめている。

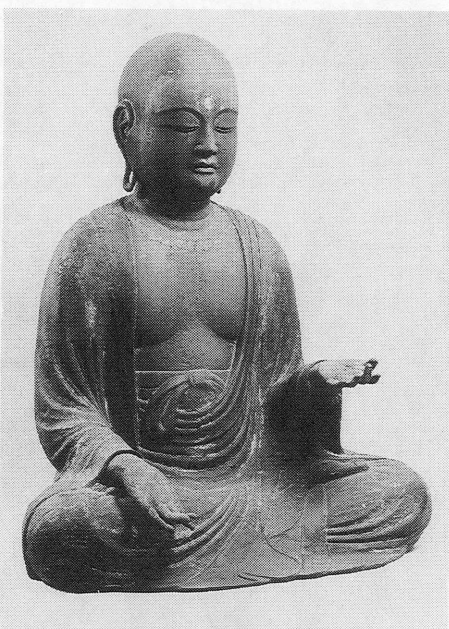
本像の作風は全体的におおらかに定朝様によってまとめられている。まず、体部に比べて比較的大ぶりの頭部が目につく。臉の線を一直線にする目のつくりや、ぼったりとした頬の肉取りとゆったりとしたなで肩には本尊像に一脈通ずるものがある。ところが体部を見ていくと胸、腹などに奥行きがないことが



地藏菩薩坐像



面相部正面



右斜側面



左側面



背面

目につき、正面性に力点がおかれていたらしく、衣文の流れや、彫りだされた皺壁にも定朝様を襲っている。また鎌倉時代の慶派の仏師が好んでおこなった後頭部の肉溜りを付けない点や、衣文の形成、こうした温和な体軀の作りは12世紀後半の制作と見られる京都・能化院の地藏菩薩坐像<sup>(26)</sup>、愛媛・保安寺旧蔵の地藏菩薩坐像<sup>(27)</sup>(奈良国立博物館所蔵)、などに通じるものであるが、いずれも定朝様への形式的な回帰がみられ、やや生彩さを欠く結果となっている。

右手は後補のものとなっているが、中世以降になって流行した錫杖を持つたちではなく、古様な与願印を結んでいることが注目されよう<sup>(28)</sup>。以上見てきたように、本像は本尊像と同じく、12世紀後半の制作と考えられるが、比較的伝統的な様風によって作られているとみてよからう。

### 3 木造帝釈天立像

本堂左脇壇に安置され、「鑑観世音菩薩」と呼ばれ信仰をあつめている。『興廃記』には本像に関する記述がなく、わずかに地史に<sup>(29)</sup>本堂脇壇に「村上天皇の守護仏と伝える鑑観音」を安置するという記事が見えるのみで伝来は明らかでない。観音と呼ばれているが胸甲の上に衲衣をあらわすその形状は、あきらかに帝釈天のものである。恐らくは信徒の口伝か、教理的に浄土宗の寺院に帝釈天がそぐわないという事情によって鑑観音と呼ばれるようになったのであろう。

像高 113.7cm。木造、寄木造りで、玉眼を嵌入する。古色仕上げ。江戸時代の制作と考えられる。

### 4 木造阿弥陀如来立像

本堂右脇壇に安置されている。『興廃記』のほか地誌にも本像に関する記事は見当たらない。来迎印を結び、台座上に立つ。素木像で、螺髪が同心円状に彫出されているのが珍しい。

像高 100.5cm。木造。ヒノキ材の寄木造り。玉眼を嵌入する。江戸時代の制作と考えられる。





阿弥陀如来立像



帝釈天立像

## お わ り に

佛陀寺諸尊の伝歴と所見、それに彫刻史的な位置について造形の面から述べてみた。ここで諸尊の歴史的史料から見た位置付けを、今一度角度を変えて考えてみようと思う。

まず、朱雀天皇の御願による造立云々はともかく、本寺が『興廃記』にあるとおり御所の中の一院であったことは、室町時代中期まではほぼ間違いのないものと思われる。恐らくその地において中興の邦諫は、後土御門天皇をはじめとする宮中の人々との交渉を深めていったものと思われる。邦諫の後を嗣いだ、融邦はやはり後柏原天皇の帰依を受けていることから知られるとおり、室町時代以降、本寺は宮中との接触によって寺領の維持をしていた感がある。本寺諸尊、特に本尊像ならびに地藏菩薩坐像はこうした宮中との密接な関係において伝来した可能性が高いものと思われる。

また、本尊像のような説法印の阿弥陀如来像は6, 7世紀の頃の高銅仏や仏の作例に多く見られるものの、9世紀後半より12世紀後半にかけては造像された例が少ない。ところが12世紀後半になると再び説法印の像は流行をみて、先にあげた滋賀・来迎寺像や静岡・願成就院像（運慶作）のような作者の個性を反映した造形が生み出されている。図像としても中野玄三氏が指摘するように<sup>(31)</sup>「山越え阿弥陀」像の流行も12世紀後半にみられ、何れも説法印である点は今後教理史的な視点もふまえて検討を要するところである。<sup>(32)</sup>また、この時期に造立された説法印の像としては、本寺像は早い時期の作例のひとつと見られ<sup>(33)</sup>、さらなる寺史の研究は重要な課題となろう。

本調査は齋藤望（彦根市立彦根城博物館学芸員）山名伸生（京都精華大学人文学部講師）長田浩（佛教大学大学院文学研究科修士課程）の三氏と筆者によって平成元年5月9日に実施された。本稿に掲載した佛陀寺諸尊の写真は齋藤望氏によるものである。

おわりに、小稿の執筆にあたっては佛教大学教授成田俊治・福原隆善、東京芸術大学名誉教授西村公朝の諸先生には、懇切なる御指導をいただき、齋藤望、山名伸生、仏教美術研究所非常勤研究員・石井俊典の諸氏に種々の御教示をい

ただいた。また、佛陀寺の高木英二住職とご家族にはいつも励まされつつ、小稿をまとめさせていただいた。末筆ながら心より御礼を申し上げたい。

(佛教大学大学院文学研究科修士課程浄土学専攻)

## 註記

(1) 『佛陀寺興廃略記』佛陀寺所蔵(未校刊)

『佛陀寺縁起』を元に29世甲空専暢が史料の散逸を懸念して明治元年の頃、和綴冊子としてまとめたもの。『佛陀寺縁起』は現在伝わっておらず、内容はあきらかでないが、京都市東山区の大蔵寺(佛陀寺の大蔵院という院号を取って寺名にしたという。浄土宗西山禪林寺派に属する)所蔵の『大蔵寺縁起』(未校刊)の開創期より室町時代の邦諫による中興に関する部分は『興廃記』とほぼ内容を同じくしていることから、『佛陀寺縁起』の内容をかなり正確に今日に伝えているものと見られる。

(2) 本寺の伝歴については次にあげる諸本に記事が見える。小稿の便宜上、諸誌に番号を付した。

- ① 『京雀跡追』たて町(著書不詳 延宝6年=1678刊)
- ② 『京羽二重』巻四(水雲堂孤松子著 貞享2年=1685刊)
- ③ 『山州名跡志』二十(坂内直頼撰 正徳元年=1711刊)
- ④ 『山城名勝志』巻之二(大島武好編 正徳元年=1711年刊)
- ⑤ 『雍州志府』(黒川道祐著 享保元年=1716刊)
- ⑥ 『拾遺都名所図会』巻一(秋里籬島著 天明7年=1787刊)
- ⑦ 『京都坊目誌』(碓井小三郎著 大正4年=1914刊)
- ⑧ 『新撰京都名所図会』(竹村俊則著 昭和40年=1965刊)
- ⑨ 『旧都巡遊記稿』(上京区之部所収)

(3) 『仏像集成3日本の仏像<京都>』P.136(昭和61年 学生社刊・田中善隆説)

(4) 大正11年7月15日に旧国宝に指定された。(文化庁編『国宝・重要文化財総合目録美術工芸編』第一法規出版 昭和55年3月)文化庁監修『重要文化財1彫刻1』(昭和47年 毎日新聞社刊)に掲載されている。

(5) 地史⑧に鑑観世音菩薩とみえる。

(6) 地史①, 松本利治『京都市町名変遷史1』P.319(昭和63年2月)

(7) 地史①, ③, ④, ⑤, ⑥, ⑦

(8) 地史②, ③, ⑤, ⑦, ⑧

(9) 阿弥陀如来坐像の法量は次の通りである。

像高	84.8cm	胸厚(右)	22.4	光背高	132.8
髪際高	71.3	腹厚	26.4		
頂一顎	26.5	臂張	52.0		

面 長	16.2	膝 張	72.0
面 幅	15.8	膝 奥	47.3
耳 張	20.8	膝 高 (右)	13.9
面 奥	21.0	台座高	55.5

- (10) 他に地史③・⑥に同様の記事が見える。
- (11) 地史⑦ではかつては「真言の道場」であったという記事が見える朱雀天皇の戒師日藏が真言の僧であったことから、本寺は創建当初はあるいは真言宗の寺院であったものと思われる。
- (12) 『佛陀寺文書』（『史料京都の歴史7 上京区』所収 昭和55年3月 平凡社刊）邦諫は精力的に浄土宗西山義の布教にあたった人物で、宮中において善導の『往生礼讃』や源信の『往生要集』を進講している。詳しくは玉山成元『中世浄土宗の研究』P.290-291（昭和51年11月 山喜房刊）、辻善之助『日本仏教史研究』（第五卷中世篇之四）P.275-276（昭和35年9月 岩波書店刊）にまとめられている。延徳3年（1491）2月没。
- (13) 参考までに邦諫に関する記事の前文を載せておく。  
邦諫上人曰、吾レ当寺ノ本尊ト深キ因縁アレハ、今日ノ住職ハ全ク如来ノ招キ玉フナラン、其謂レハ、吾ハ実ニ乳母ヲ知ラス、当寺ノ堂下ニ捨ラレシヲ住職アハレミ玉ヒテ、此レ彼ト頼ミテ乳汁ヲ乞テ養ヒ玉フル、何レトモナク婦人來テ七日ノ乳ヲ与エラル、住僧不審アリシニ、然ルニ、満七日ノ朝スク本尊ノ面容ヲ拝シ玉フニ、如来ノ右ノ乳ヨリ白汁流レテ御膝ニ伝ヒ流ル、上人思ヘラク、本尊婦女ト化シテ、此間捨子ニ乳味ヲ施シ玉ナラント感信シ奉リ、サテ夫レヨリ一器ノ仏飯ヲ日日与ヘ玉フニ、此人ノ食ヲ進ル如ニシテ、毎朝之ヲ与ヘル、其余ハ不食七カ年ヲ経タリ、爰ニ山下氏何某上人ノ許ニ來リ、吾レヲ見テ愛憐深シテ、求メ得テ実子ノ如クス、而シテ十歳ノ時養母ニ後レ、又十三歳ニテ父ニ離ル、父臨床ニ及テ、上件ノ事具ニ語玉フ、依テ始テ、当寺ノ本尊並住僧及養父母ノ恩恵ノ深キ事ヲ知レリ、吾恩ニ背カス出家センカ、今ノ歳六十余ノ寿齡重メレトモ、一朝一小器ノ飯ヲ以テ一昼夜ヲ養ヒ、是其由ナリ等ト、已上、
- (14) 史料集成『尊卑分脉』第三編。父は至、祖父に安があてられる（P.21）。
- (15) こうした少年相の作品について井上正は論文「定朝以降の諸相」（『日本古寺美術全集9』昭和56年7月 集英社刊）の中で定朝が作風の上で乗り越えた点を特に二点康尚的なものとして「少年相と刀の鐔を浅く立てる衣文表現の組合せ」と指摘している。
- (16) 井上正「法金剛院阿弥陀如来像について」（『国華』941 昭和46年）
- (17) 武笠朗「安楽寿院阿弥陀如来像について」（『佛教芸術』167 昭和61年7月）
- (18) 井上正「万寿寺阿弥陀如来像について」（『MUSEUM』248 昭和46年11月）
- (19) 井上前揚書
- (20) 淡江次郎「元享二年銘の阿閃佛像」（『大和文華』第7号 昭和27年9月刊）に詳し

い。

- (21) 院廣については清水真澄「佛師院廣とその作例」—十四世紀における院派佛師の動向をめぐって—(『國華』第82編第4冊 通刊973号 昭和49年9月)に詳しい。清水氏は束の制作の目的について「頂相彫刻のように裳先を大きくつくる像が前に傾くのを防ぐためにあるとされている」と田辺三郎氏の談を取り上げているが、本像のようにしっかりとした地付き部を有する作例ではまず転倒することはあえて考えられない。院廣の作例としては、福岡・善導寺阿弥陀如来坐像(貞和5年=1349)、山梨・棲雲寺普應国師像(文和2年=1353)、栃木・宝蔵寺普賢菩薩坐像(文和3年=1354)等が知られており、いずれも束を制作している。

- (22) 井上氏前掲書

- (23) 『仏像集成 3』図版・解説所収 P.185

- (24) 齊藤望「彦根市来迎寺の阿弥陀如来坐像について」(『MUSEUM』448号 昭和63年7月)

- (25) 地藏堂本尊地藏菩薩坐像の法量は次の通りである。

像 高	85.0cm	胸 厚(右)	19.6
頂一顎	27.0	腹 厚	22.5
面 長	17.8	臂 張	50.2
面 幅	19.0	膝 張	68.8
耳 張	19.0	膝 奥	39.9
面 奥	19.1	膝 高(右)	12.6

- (26) 『仏像集成 3』図版・解説所収 P.296

- (27) 毛利久「伊予における阿弥陀五尊像の一遺例」(『日本佛教彫刻史の研究』所収 昭和45年5月法蔵館刊)

松島健『地藏菩薩像』(日本の美術 239 至文堂刊) 図版・解説所収 P.46

- (28) 平安時代後期の錫杖を持つ形の地藏像には文治3年(1187)造立の銘のある滋賀・榛野寺地藏菩薩坐像をはじめとして京都・能化院地藏菩薩坐像、京都・六波羅蜜寺地藏菩薩坐像等がある。また与願印の像としては本像の他に奈良・東明寺地藏菩薩坐像、京都・善願寺地藏菩薩坐像などがあるが作例は少ない。反面、平安時代初期の地藏像では与願印のものが主流をしめる。

- (29) 地史①、『京都市町名変遷史』

- (30) 11世紀頃の説法印の作例としては、大阪・孝思寺の伝、弥勒仏坐像が知られている程度である。

- (31) 中野玄三『来迎図の美術』(昭和60年 同朋舎出版刊)

- (32) この問題は課題を残すが、参考のために説法印の阿弥陀如来像の印の諸相と各像の制作年代をここにあげておく。

〔調査報告〕京都市・佛陀寺諸尊について

右手	左手(指)	所 蔵 者	制作年代
1-2	1-2	：埼玉・鳥居観音阿弥陀如来立像	12世紀後半
		：福岡・無量寺阿弥陀如来立像	13世紀
1-2	1-3	：奈良・法隆寺阿弥陀如来坐像	12世紀後半
		：高知・安楽寺阿弥陀如来坐像	14世紀前半
1-3	1-3	：京都・佛陀寺阿弥陀如来坐像	12世紀後半
		：滋賀・来迎寺阿弥陀如来坐像	12世紀後半 (建久6年=1195作)
		：奈良・弥名寺阿弥陀如来坐像	13世紀
		：東京・大正大学阿弥陀如来坐像	12世紀後半
		：静岡・願成就院阿弥陀如来坐像	12世紀後半 (寿永2年=1186作)
		：大阪・専修寺阿弥陀如来坐像	13世紀
		：三重・成願寺阿弥陀如来坐像	13世紀
		：京都・八角堂阿弥陀如来坐像	13世紀
		：埼玉・廓信寺阿弥陀如来坐像	13世紀
1-4	1-4	：兵庫・多聞寺阿弥陀如来坐像	12世紀後半
		：奈良・西大寺阿弥陀如来坐像	12世紀後半
		：奈良・法隆寺阿弥陀如来坐像	
		：奈良・新薬師寺阿弥陀如来坐像	14世紀後半

(33) 前註参照